The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	復興都市の異音 ―沖縄占領下、「流動する生活圏」―
Author(s)	謝花, 直美
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69684
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　謝 花 直 美　）	
論文題名	復興都市の異音 ――沖縄占領下、「流動する生活圏」――

論文内容の要旨

本論は、沖縄戦から主に１９５３年までの占領期沖縄を対象に、復興を歴史形成過程とし、複数の主体間に現れた占領のポリティクスを考察することを目的とする。この時期に、ＦＥＣ指令による復興目標が達成されたという米軍が描く単線的な復興は、沖縄の人々の視座からは、回復しないままの沖縄戦の傷に、占領の暴力が振るわれている過程であり、米軍や為政者との非対称な権力関係によって占領のポリティクスが顕在化していく時代であった。人々は生き延びるために、直接的な人と人とのつながりから個々の「生活圏」を形成し、復興を目指したのである。本論は、喜安朗の「民衆の生活圏」を方法論としながら、沖縄の占領下を考察する枠組みとして「流動する生活圏」という概念を分析の手がかりとした。「生活圏」は米軍占領によって、共同体を育んだ土地と切断され、生存をかなえる労働を基盤として移動していった。その過程で、復興目標は繰り返しずらされ、外形的にも構造的にも流動化していったのである。

分析する地域として、戦後復興の焦点となり、戦前と戦後は「那覇は別のもの」と言われるほど変容した那覇市とその近隣地域を対象とした。那覇市と、隣接した真和志村は、戦後米軍用地として使用されたために、複数の主体がそれぞれの「流動する生活圏」を形成して流着し、変容がもたらされた。縫製業と新天地市場の女性たちや、那覇軍港に故郷をとられた那覇市垣花の人々、那覇市に合併した真和志村（市）の人々、琉球大学で「復帰」や平和を訴えて退学させられた「琉大事件」の学生たちを主体に、個々の「流動する生活圏」の形成過程と、戦場と占領が混在した復興過程の生存欲求を描く。その上で、米軍が沖縄復興を達成したとする１９５３年とは、戦場と占領が、個々の主体の固有の問題として不平等に格差づけられ固定された時点ではなかったか、米軍が主導した復興とは、暴力という異なる形として現れたのではないかとう論点を設定し、個々の「流動する生活圏」から考察する。

本論文は第１章から第５章までで構成されている。各章の構成は以下のようになっている。

第１章では、労働や移動、学び、生産、市場形成という、労働史、戦後史、戦後の生産など各分野にわたる女性と縫製の関わりを、「ミシン業」という視点から横断的に考察する。従来、家内工業や縫製業、市場という経済行為として女性たちの生産と労働はとらえられてきた。実際には、女性たちは、米軍によって振るわれる暴力を逃れ、生き延びるために洋裁技術を獲得し、市場すらつくりだしていた。また欠けていた社会保障を「ミシン業」によって補おうとすらした。米軍への抵抗、自治への希求を考察してきた沖縄戦後史の主流からは見えづらい女性たちの姿を、「流動する生活圏」とともに復興史の枠組によって捉え直す。沖縄戦後史の表舞台に登場しない女性たちの生存がいかに沖縄戦と占領に規定されていたのか、女性たちの求めた復興とともに考察する。

第２章は、那覇市垣花の人々が、戦後、米軍那覇軍港となった故郷へ帰還し、地域共同体の再建と労働の自律を復興目標としたことを論じた。港湾労働者や漁業者だった人々は、生存のために軍作業に就労し「流動する生活圏」を形成し、復興を試みていく。旧具志川村の米軍ホワイトビーチの労働者が居住した地域である金武湾区、那覇軍港で就労した那覇港湾作業隊の「みなと村」にいたのが、垣花の人々だった。一方で、各地で困窮した那覇市出身者として社会保障の整備とともに存在が注目されるようになった女性や高齢者は、重労働の軍作業に参加できず、「流動する生活圏」が移動する際に、取り残された人々だった。復興を求めて移動した人々も、米軍と沖縄指導者層の復興目標との衝突で、その夢は手折られていった。人々は、合併那覇市の各所に分散し、かつての「流動する生活圏」を定着させていったのである。「流動する生活圏」の特徴である流動性は、生存を求める主体に決起という行動を取らせることはなかった。しかし、垣花の人々も、生を沖縄戦と占領によって規定されていたのである。

第３章では、那覇市に隣接した真和志村（市）に着目し、人々が労働を基盤として形成した「流動する生活圏」が都市の変化を方向付け、結果的に「別のもの」である合併那覇市をつくりあげたことを考察した。那覇市民と真和志村民の戦後の引き揚げの遅れは、これまで地域史の枠組みでは別々に考察されてきた。しかし、市域の過半を軍用地に接収されていた那覇市と隣接する真和志村への那覇市民帰還と他村からの人口集中は一体に論じられるべきであろ

う。人々は、垣花の人々同様に生存のために軍作業に包摂される形で移動し、個々の「流動する生活圏」を形成した。これらの人々が「流動する生活圏」を土地に定着させることは、復興の足掛かりとなった。米軍、沖縄民政府によって那覇市復興を優先させるために、真和志村域を削り取られることが繰り返され、真和志村の人々が抱いた農村を基盤とした復興は挫折していった。那覇市と真和志村（市）間の合併協議が度々持ち上がりながら、そのたびに決裂したのは、これまで地域的な政争として考察されてきた。しかし、実際には、戦前からの村民の「生活圏」と戦後に流着した「流動する生活圏」との間に起きた復興目標をかけた生活の場の闘争が、政治の場の闘争へとより上がった結果だったのである。真和志村は、１９５３年に米軍の武力による軍用地強制接収が起き、同事件は「銃剣とブルドーザー」として広く知られてきた。沖縄戦後史が抵抗の原点として考察してきた同事件以前に、復興を到達しようとする他者の生活の営みによって真和志村の土地は奪われていたのであり、復興は暴力も内包していたといえるだろう。

第４章では、１９５３年に琉球大学で平和運動をした学生４人が退学処分を受けた「琉大事件」を、復興の中に再定置して論じた。沖縄戦後史は、同事件を学生に対する人権弾圧として考察してきた。しかし、本論では、沖縄戦を生き延びた学生たちが、生存の欲求を「復帰」運動や平和運動という形に託し、決起したという視座から考察した。沖縄と奄美の学生たちは占領によって引き直された境界線によって閉ざされた空間で結びつき、自らの戦争や占領の体験を共有することで、「流動する生活圏」を形成していた。学生たちは政治集会や原爆展開催によって、占領によって規定された「流動する生活圏」と、大学を自律的に生きられる場へと変革しようと、決起した。しかし、琉球大学は、戦前から教育者が求めてきた復興の実現であり、学園の改革を訴える学生たちは、その復興目標からは「よそ者」でしかなかった。米軍は、占領施策に沿った民主主義を教える「情報教育計画」を推進するために大学を設立しており、学生たちの決起を占領への抵抗ととらえ、「アカ」として排除した。「琉大事件」を介して米軍による「アカ」の指弾が表面化、社会に知られていくことで、人々は分断され、「琉大事件」が学生たちの生存闘争であったという固有性を見失わせていった。現在まで続く「第２次琉大事件」と「琉大事件」に対する異なる視座は、今なお占領の暴力が継続していることを意味する。

第５章では、１９５０年に始まった「米琉親善」事業と、人々の同時代の軍政への名付けである軍政長官の名を冠した「シーツ善政」による、心の動員と身振りに現れるポリティクスを考察した。第４章までの「流動する生活圏」という人々の視座からの考察に対し、同時代を覆ったポリティクスに着目して論じた。二つの次章は、これまで前者がプロパガンダとしての文化政策、後者は沖縄の長期保有方針による米国の施策変更に対する人々の受け止め方として、別々の事象として記述されてきた。しかし、「米琉親善」の主役ペルリ（ペリー）も、軍政長官のシーツも軍人としての横顔に着目させないことで、人々との友好関係を成り立たせ、占領への協力を促そうとした点が共通していた。「米琉親善」と「シーツ善政」は、その言葉とは裏腹に、隠された暴力の存在を示していたのである。押し隠された暴力を認識しながらも、それに気付かないふりをして、親善や復興へ参加することは、人々の心と身振りを一層乖離させることになった。「米琉親善」の事業の中には、存在するはずがない「復帰」や日本の存在が読みこまれていくのは、米軍の構造的暴力を直視する意志が形成されつつあることを示していた。

終章では、第１章から第５章まで個別に考察してきた「流動する生活圏」と主体が、互いに影響しながら存在して、摩擦が起きていたことを個々の関係性に言及しながら、指摘した。

本論では、複数の主体を考察する「流動する生活圏」を復興の過程に定置し、復興史として考察した。復興の視角から沖縄戦後史を考察する意義は、為政者による単線的な戦場、占領、復興の概念を、人々の視座から考察するためである。沖縄戦後史が記述してきた抵抗する主体においては、これらの人々は歴史の中心ではなく、主軸の歴史を補完する立場の登場人物でしかなかった。しかし、「ミシン業」の女性が、米軍の仕事を引き受けながらも、「心まではとられない」と、かすかに呟くことは、米軍と関わる労働を通して生き延びる中でも、決してゆずることができない一線があったことを示している。このつぶやきのような異音を、復興史として聴くことが、米軍基地をめぐる抵抗史として記述が重ねられてきた沖縄戦後史を再定義することになるといえる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　謝 花　直 美　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	杉原　達
	副 査	大阪大学　教授	北原　恵
	副 査	大阪大学　准教授	北村　毅

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　復興都市の異音
―沖縄占領下、「流動する生活圏」―

学位申請者　　謝花　直美

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　　杉原　　達
副査　大阪大学教授　　北原　　恵
副査　大阪大学准教授　北村　　毅

【論文内容の要旨】

本論文は、沖縄戦から 1953 年頃に至る那覇市とその近隣地域を対象に、復興過程の中に現れた占領のポリティクスについて、各種文書や聞き取りなどの諸資料を総合的にふまえながら考察するものである。序章では、広範な先行研究の渉猟に基づき理論的な検討を通じて獲得した「流動する生活圏」という概念を手がかりとして、複数の主体間に見られる不均衡な関係の具体的分析をすすめて課題に向き合うという立場を明確にする。

第 1 章では、縫製業や家内工業の範疇で捉えられてきた女性と縫製の関係を、社会福祉や授産事業としての側面にも留意しつつミシンというモノを媒介とする「ミシン業」という横断的な領域から捉える。本部半島の「戦争未亡人」たちの那覇市への移動や、同郷出身者を呼び寄せる「ヒキヒキー」という繋がりに着目し、沖縄で初めて成立した既製品市場である新天地市場が、軍用地接収の暴力から女性たちが生き延びるために形成した「流動する生活圏」に基づいて生まれたことを示す。

第 2 章では、那覇市垣花の人々が、生存をかけて軍作業に従事し「流動する生活圏」の中で生き延びることによって個々の復興をめざしたことを論じる。具志川村金武湾区と那覇港作業隊の「みなと村」が、垣花の人々の「流動する生活圏」として形成されていく過程をみるとともに、その流れに取り残された女性や高齢者の存在を指摘する。さらに垣花の人々にとっての復興の推進が、真和志村の人々の復興の夢を閉ざすという矛盾を剔抉し、復興が、米軍や沖縄の指導層と生活圏との非対称的な権力関係の中で展開せざるを得なかった内実を示す。

第 3 章では、軍用地に故郷を奪われた人々や就労を求める人々が形成する個々の「流動する生活圏」が、真和志村民の復興を閉ざしてしまう過程を、より具体的に論じる。那覇市の復興が優先された結果、真和志村域は縮小を強いられ、村民による農村復興の希望は挫かれていく。那覇市と真和志村の合併が遅れた背景には、戦前からの村民の「生活圏」と戦後に形成された「流動する生活圏」との間に、復興をめぐる摩擦があったことが指摘される。

第 4 章では、1953 年に琉球大学で行われた沖縄及び奄美出身学生 4 人への退学処分（琉大事件）の歴史的意味を問う。大学という場を自律的な生存を求める場として捉え直し、平和運動や復帰運動に託す形で自己主張した彼らに対して、米軍は「アカ」として排除し、この指弾が拡大していくことで、学生の決起の意味、固有性が簒奪されていった過程を丁寧な聞き取りを通じて検証する。本件は現在でも、島ぐるみ闘争に接続する第二次琉大事

件（1956 年）の前段として位置づけられるにとどまっているが、本章は当該事件の有した独自な歴史的位置を浮き彫りにしており、研究史における認識の転換を鋭く促している。

第 5 章は、米琉親善事業と「シーツ善政」による、心の動員に現れるポリティクスを取り上げる。前者は海軍提督ペルリ来琉 100 年にあわせた事業であり、後者は占領下の軍政長官の名前を冠した時代への名付けとして、時代を縦断する形で沖縄に直接に関わった米軍の象徴である。両者は、ともに占領への協力と理解を求め、その暴力性への思考を阻むものとして立ち現れた。関連事業の分析から、復興への多義的な姿勢を映し出す人々の営為を掘り起こし、抵抗の水脈とは必ずしもいえない主体のあり方の複数性を照らし出した。

終章では、本論文の成果を概括するとともに、今後の課題を整理した。

【論文審査の結果の要旨】

以上の内容をもつ本論文の特徴の第一は、いわゆる沖縄研究の分野のみならず広く歴史・文化研究に目を広げ、ガヤトリ・スピヴァク、喜安朗、梶村秀樹らの先行研究をふまえて考案した「流動する生活圏」という概念を活用して分析を展開し、戦後沖縄史研究に対して新たな知見を提示した点である。人々の直接的繋がりの中で形成された生活圏が、占領下で移動を余儀なくされ、構成員や力関係に変容が生じつつ可変的に流動する過程で、生存の拠り所となる一方で他の生活圏との矛盾の中におかれるという点に着目し、人々の生活の諸側面を立体的に描き出したところに本論文のオリジナリティがみられる。そこから、弾圧と抵抗という二分法では接近できない、生活の中から生まれるつぶやきのような異音を復興過程の中に見出していく手法は斬新である。

特徴の第二として、徹底的な資料収集に基づいた詳細な記述があげられる。新聞記事の渉猟、関係公文書の発掘に加えて、広範な関係者からの聞き取りを蓄積し、それらを行論の各所に配置した分析の展開は、文字及びオーラルの資料を総合したもので圧巻ともいえる内容を有している。とりわけ女性からの聞き取りを介して、占領によって生存の幅を狭められた彼女たちの生活世界における独自の復興過程が浮き彫りにされた点は特筆すべきである。

とはいえ、いくつかの問題点も存在している。まず本論文では復興の起点を沖縄戦に求めているが、より長期的スパンを考慮し、1920 年代のソテツ地獄から説き起こすことによって、問題点がより重層的に浮かび上がることが予想され検討が必要である。また性暴力のあり方を、当事者に即してさらに具体的な場と関係性の中で論じることが求められる。さらに本論文で提起した「流動する生活圏」という概念は、本研究を越えて普遍的な適用が可能かどうか、それはどのような条件のもとにおいてなのか、といった理論的検討も残されている。しかしこれらの点は、いずれも今後の課題であり、一層の研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。